

血液検査における不適切検体の発生状況と改善への取り組み

◎那須 隆之¹⁾、榎 優子¹⁾、山本 剛正¹⁾、脇田 満¹⁾、大澤 和彦¹⁾、三澤 成毅¹⁾、平山 哲¹⁾、三井田 孝¹⁾
順天堂大学医学部附属 順天堂医院 臨床検査部¹⁾

【目的】当院臨床検査部では、検査の品質を管理し、患者の負担軽減と所定時間内の結果報告を目的に、各検体の適切性の評価と採り直し検体の削減に取り組んでいる。そこで、採血検体における採り直し検体の発生状況と取り組みの効果を報告する。

【方法】期間は取り組みを開始した2016年4月～2021年10月までである。適切な採血検体の定義は、正しい採血管の使用、規定量が採取、抗凝固剤入り採血管は血液が凝固していないこととした。取り組みは、①定義から外れた不適切な検体の種類、内容、発生場所等のモニタリングとフィードバック(2016年)、②不適切検体発生を原因分析するための検体採り直し記録票の導入(2017年)、③シリンジ採血による分注優先度を示すポスターの配付と掲示、④新任看護師を対象とした採血および採血管の取り扱いに関する定例研修会の実施(2018年)、⑤院内の医療安全に関する研修会で検体の凝固と量過不足防止に関する説明(2019年)である。

【結果】取り組み開始当初の不適切検体数は月平均

118件であり、原因別には検体凝固104件、量過不足13件、採血管間違い1件の順に多く、発生場所は病棟が多かった。発生状況のモニタリングと評価から、①～⑤の取り組みを順次行った結果、不適切検体数は月平均40件まで減少した。2019年には新生児採血における微量採血管の検体凝固が増加したことから、採血の担当医師と相談し、足蹠採血キットを変更し採血時の注意点を説明した結果、検体凝固が減少した。検体量過不足と採血管間違いは、研修会と病棟へのポスター掲示以降減少し、検体採り直しの減少に繋がった。

【考察】不適切検体発生の減少は、検体採り直し記録票へ原因を記録することによる意識付け、モニタリングと原因分析に基づいた研修会の実施、ポスター掲示によると考えられた。

【結論】臨床検査部が他部門における採血管の取り扱いに積極的に関与することは、不適切検体を確実に減らし、検査の品質確保にとって極めて重要である。

連絡先: 電話 03-3813-3111(内線 5180)